



六ヶ所村立郷土館 企画展

郷土を拓いた人々

～泊湊は、人とモノの交差点～

泊(1)遺跡からは、約5千7百年前の縄文時代から人々が暮らしていたことがわかっている。江戸時代の旅行家菅江真澄も泊の磯漁の様子を旅行記に記している。明治時代に入り、泊漁業組合は県内で最初に設立された7つの漁業組合の1つで、初代組合長種市忠七氏が、積極的な漁業振興を図り、後に県内有数の漁港として発展していく。広大な海を開拓してきた人々の歴史を振り返る。

【縄文時代から人々の交差点】

円筒下層式土器の縄目を分類すると、大きく津軽と南部、下北に分けることができる。泊(1)遺跡から出土したたくさんの土器には、津軽や南部に多い文様の土器や泊独特の文様の土器も出土していることから、泊地区は、縄文時代から北から南から、人やモノが交わる拠点だったことがわかる。



泊(1)遺跡に多い
単軸絡条体

【江戸時代の名産品は？】

『南部史要』延享元年(1744)の「領内産物」にかかわる部分では、南部藩北部地域による重要水産物が、次のように挙げられている。



アワビ漁 昭和40年代

「鮑 七戸泊湊を上品とす。白魚 七戸平沼より出ず。」

【風待ち湊？】

泊漁港は、江戸時代から東風や東南の風が吹けば、利用が困難で「ヤマセが吹けば船を出せない」という悪条件を背負った港だった。



風待ちの漁師

【上北郡下では、最初の泊漁業組合】

泊漁業組合規約は、海産物の改良増進や製品検査・品質格付けなど、不良乾製品(質の悪い干物など)からの脱却を呼びかけていて、組合が打ち出した積極策だったことがわかる。初代組合長は種市忠七氏である。

【明治期のカツオ漁】

明治時代中期、カツオ釣り漁業の拠点は、鮫・湊・泊・白糠があったが、漁船が小型で沿岸に出漁できないことで、漁獲量は少なかった。そこで、県は、明治37年(1907)試験船を導入。泊を拠点に、青森県の沿岸漁業の普及を試みた。泊においても意欲的に挑戦する

漁民が出てきた。

【大正期のカツオ漁】

カツオ釣り漁業の課題は、漁船が小型で沿岸に出漁できないことと、餌料の供給に不備な点があったことである。大正7年(1918)県は漁船建造補助費1,200円を予算計上し、改良漁船の一層の普及を図る。泊ではこの制度を利用し漁船を取得するものが出てきた。その後カツオが不漁となりイカ漁が盛んになる。



カツオ漁漁船 焼山湾 大正14年(1925)

【明治・大正期のイカ漁】

明治中期から、イカを追って日本海を北上してきた佐渡の漁民集団があった。川崎船のことで、「まわり」「まわりぶね」、川崎衆と呼ばれていた。明治25年(1892)から4年間、青森県は、新潟県佐渡から熟練者4名を招へいし「柔魚釣り漁業の技術改良普及」に努めた。明治28年(1895)11月13日 種市組合長が、青森県知事佐和正氏あてに感謝の意を表明して感謝状を贈っている。新しい技術の導入は、いつの時代もすんなりと行かないものである。



【昭和期のイカ漁】

鮮魚市場を持たない泊漁村。空き地という空き地に縄かけのイカが下がり、スルメづくりに明け暮れる生活であった。昭和の時代に入っても、時化ると風待ちしている漁師たちの姿と時化でも八戸の漁船が泊沖に来て漁をしている様子が見られた。

【漁場拡大と八戸船団】

昭和44年(1969)1月15日、「泊船団いか釣り協議会」を組織。六ヶ所泊港に在籍する20トン以上の漁船群が八戸を根拠地にして、北は北海道の稚内、留萌港から、南は九州博多港辺りまで移動回港しながらイカ釣りの漁場を拡大操業していた。

【県内を代表する漁港へ】

泊漁港は漁場に近く魚が豊富にとれたが、昔は砂浜の漁港だったので、波が高いと船を出せずにいた。船も大型化した1975(昭和50)年頃から焼山漁港に移動し、国・県・漁協が、1998(平成10)年頃から防波堤や護岸を整備し、船揚場や新荷捌施設、製氷・貯氷施設や道路も整備し、新鮮な魚をより早く出荷できるようになった。おかげで高潮の被害も減り、安心して暮らせるようになった。しかし、現在は、魚資源の減少が



焼山漁港



泊地区漁港の歴史年表

西 暦	年号	主 な 出 来 事	
1744	延享元年	・「鮑（アワビ） 七戸泊湊を上品とす。」 『南部史要』より	 アワビ漁と磯漁
1756	宝暦6年	・「魚粕の原料魚のイワシ漁が始まる」 『七右衛門文書』より	
1770	明和7年	・「泊港は、東風や東南の風が吹けば、利用が困難で、ヤマセが吹けば船を出せない、という悪条件を背負った港だった。」 『日本汐路の記』より	
1833	天保4年	・「泊スルメイカ漁が開始された」 『八戸市史資料編』より	
1892	明治25年	・泊漁業組合が設立。上北郡下で最初に組織され、県内には7漁業組合があった。	
1895	明治28年	・県主催の「イカ釣り技術伝習」が六ヶ所村で行われた。泊漁業組合頭取種市忠七は、青森県知事佐和正殿あてに、イカ釣りの経緯を詳しく記述して、感謝状を贈る。	
1932	昭和7年	・漁港や船溜施設の整備が取り上げられ、泊港は3万円の国の事業補助が付く。	
1936	昭和11年	・カツオ一本釣りに代ってイワシ流網漁業やマグロ延縄漁、イカ釣り漁業が行われる。	
1938	昭和13年	・泊に初めて発電機が導入される。    	
1949	昭和24年	・漁業会は解散消滅し、泊漁業協同組合が誕生。組合長は種市忠七、組合員正 492 人 ・青森県の単独事業による泊漁港整備計画に基づく工事が始まる。2年間。	
1950	昭和25年	・イカ釣り船に発電機が導入され、500wの白熱灯が4個付けられる。 ・ヤマデの両腕の釣り針の数を増やして釣り上げる「ツカミバリ」が普及。	
1951	昭和26年	・泊港が第1種漁港に指定。	
1958	昭和33年	・「ドラム巻き式」の漁具が開発され、個人の釣りの技能差がなくなる。	
1959	昭和34年	・国の新農山漁村建設総合対策により「冷蔵庫」を建設。総工費 215 万円。	
1960	昭和35年	・「生イカ販売」を共販事業とし、スルメ製品のダンボール箱詰め出荷を開始。	
1963	昭和38年	・第二次修築工事完了。第三次修築事業を8ヵ年の予定で進める	
1965	昭和40年	・強風、高潮来襲。漁船の流失・損壊 60 隻、住家の全壊 51 棟、家屋浸水 164 戸、重軽傷者 21 人、約 19 億円を超える大被害を受ける。	
1966	昭和41年	・青森県に泊漁港を第4種漁港（避難港）としての整備を求める「陳情書」を提出。	
1967	昭和42年	・泊漁港南側の防波堤（護岸工事）680mが完成し、さらに南方へ650m延伸築造。 ・焼山地区に「鮮魚荷捌所」を設置。短波漁業無線局を開局。給油所の完成。	
1968	昭和43年	・泊に「全自動イカ釣り機」が登場。労働力不足を補い、漁業操業形態が一変。	
1969	昭和44年	・「泊船団いか釣り協議会」を組織。北海道から九州博多港まで、移動回港しながらイカ釣りの漁場を拡大操業する。 ・焼山と泊漁港が第4種漁港（避難港）に指定。	
1973	昭和48年	・製品スルメを終了し生スルメイカを販売。家族総出のスルメづくり風景も消えた。	
1980	昭和55年	・地区内の漁獲物を一元的に集荷する。	
1981	昭和56年	・アワビ種苗供給センター完成。	
1982	昭和57年	・泊地区漁民研修センター完成。	新荷捌施設・漁協
2002 ～ 2016	平成14年 ～ 平成28年	・青森県は、水産流通基盤整備事業を焼山漁港・泊漁港で実施。焼山漁港では、沖防波堤新設、護岸・岸壁新設、船揚場、新荷捌（にさばき）施設新設、製氷・貯水施設完成、焼山大橋新設。泊漁港では、沖防波堤を新設。	